

全学共通教育についての自己点検・評価報告書（教育部会会）

教育部会名：法と政治

部会長名：馬場健一

作成者名：馬場健一

概要（2000字）

1. 組織・運営について

平成28(2016)年度の「法と政治」教育部会は、国際文化学研究科5名、人間発達環境学研究科3名、法学研究科4名、海事科学研究科1名、国際協力研究科1名の教員14名から構成され、部会長1名、幹事1名が世話役になり運営されている。

2. 実施状況について

当部会は、以下に見る年間16コマの基礎教養科目（各1単位）、年間26コマの総合基礎科目（各1単位）のほか、年間1コマの教員免許資格のための科目である「日本国憲法」（2単位）、年間4コマの共通専門基礎科目「日本国憲法1, 2」（各1単位）（経済学部、経営学部対象）を担当している。これら「日本国憲法」「日本国憲法1, 2」は毎年非常勤講師に依頼をしている。（なお「日本国憲法1, 2」は本年度限りで廃止予定である。）基礎教養科目は、「法学A」「法学B」「政治学A」「政治学B」（各4コマ）の4科目が、総合教養科目は「社会生活と法」（10コマ）、「国家と法」（8コマ）、「現代社会と政治」（8コマ）の3科目が開講されている。これら基礎教養、総合教養科目は、その科目の性質上、法学部が要件外指定学部とされているが、それ以外の学部の学生全てに開かれており、本年度も従来通り相当数の学生が、それぞれの科目を受講している。42コマの、部会構成員間での担当割合は、国際文化学研究科所属担当者が18コマ、人間発達環境学研究科所属担当者が6コマ、法学研究科所属担当者が8コマ、海事科学研究科所属担当者が2コマ、国際協力研究科所属担当者が2コマとなっている。

講義形式は、一般の教室講義形式で行われるものが主であるが、中には双方向的、対話形式をとり、毎回すべての受講生に予習として、簡単なショート・エッセイを作成させたうえで、クラスをいくつかの小グループに分け、相互に疑問・批判を発表してもらうという討論形式で授業を進めていくものや、法学の基礎的な内容を多面的に解説し、それと関連したディスカッションを学生間で行わせるものもある。

成績評価は、期末試験によって行うものおよびレポート提出によるもの主であるが、科目によっては、授業中に行う判例報告で報告した場合や、裁判傍聴レポートまたその他のレポートを提出した場合、授業中の発問に対して積極的に答えた場合、などを期末試験に加えた加点要素とするものもある。講義ごとにコメントペーパーの提出を求める科目もある。

今年度の工夫、改善点としては、BEEFシステムを使い始めた科目が増えたことがあげられる。その他、昨年の外部評価の結果や学生アンケートの内容を踏まえ、各自が講義の改善を行っている。

現状と評価については、上記のとおり概ね満足のいく結果となっているものと評価できる。とはいえ今後も個々人の努力に加え、部会員の相互研鑽を進め、さらに改善向上を行っていくべきものと考えている。

3. 教育の現状とその評価

具体的には現代社会における法と政治の機能や役割について、下記のように多角的な視点と多様な方法によって講義が行われた。

- (1)「映像で見る法と社会」として、視聴覚教材等を活用し、法学を専門としない受講生にとっても身近かつわかりやすい社会生活に関わる法学入門講義を行った。
- (2)法学を専門としない学生を対象とした、法学の入門的な講義として、複雑化、グローバル化する現代社会において主体的市民として生きるために最低限必要な法学の基本的な知識および考え方を身に付けることを目標とした。講義の中では、国内社会と国際社会の差異に着目し、それぞれの社会において妥当している法の特徴、機能について検討した。
- (3)法の基礎にある、合理性と権利・公平性につき、具体的事例を取り上げながら検討を行った。前半は、「法と経済学」の例をいくつか取り上げ、後半は米国における「権利論」および権利運動の例を題材として講義を進めた。
- (4)国家と法の基本問題についてアプローチするため、具体的な素材として、公害環境問題を選定した。
- (5)教科書を基盤にしつつ、各国や地域からの視座を学ぶための事例について理解を深めた。講義の内容を受けての考察を、コメントペーパー記入の形でその場で行ってもらった。これにより現代の国際政治の大枠と、国や地域からの目線の多様性を考察し、国際関係を形づくる理念や価値観の多様性と、その相互理解の必要性について理解を深めることにつなげた。
- (6)現代における格差(貧困や不平等)、労働問題などの社会問題について考察しながら、それらの問題の当事者の声を政治および政策に反映させる仕組みの構築(住民、当事者の政策参加)の重要性や、民主主義について考えを深めることを目標とした。
- (7)現代世界では、ヒト・モノ・カネ・情報が国境を超えて急速に行き交っている。国内政治と国際政治を互いに切り離しては、そのいずれも適切に理解することは難しい。また、国内社会、国際関係のいずれにおいても、政治と経済は相互に密接に関連している。国内政治と国際政治、政治と経済の相互作用に関わる現象に着目しつつ、冷戦後の国際関係について検討した。
- (8)政治学の対象、方法、理論等をトピックスを交えて、政治学を専攻しない学生向けに平易に解説した。政治史や政治理論、国内外の現実政治の話題などを素材に、政治学の基礎的考え方を紹介し、政治学における基本的な知識および政治学的な「ものの見方」を学び、理解すること、また現代社会における政治の役割を理解させた。
- (9)まず歴史的に国際法がどのようにできてきたのかをみることによって現代国際社会がどのような構造をしているのか、を理解させた。その上で、国際社会で戦争が法的にどのように考えられていたかを学んだ。
- (10)法学の基礎的な内容を多面的に解説し、それと関連したディスカッションを学生間で行わせた。
- (11)1年生を対象とし日本国憲法に関する講義、すなわち憲法総論及び人権の各論部分、統治機構についての講義をおこなった。

評価については、上記のとおり概ね満足のいく結果となっているものと評価できる。とはいえ今後も個々人の努力に加え、部会員の相互研鑽を進め、さらに改善向上を行っていくべきものと考えている。

#### 4. 課題について

講義内容については上述のとおり、概ね問題がないと思われるが、1単位化、クォータ制の導入、基礎教養科目、総合教養科目といった新制度一年目ということもあり、移行に伴う講義内容や講義編成の変更が実際にうまくいっているのかどうか、更に細かく検証していく必要がある。さらに来年度からは部局の統合にともなう新しい部会組織運営上の課題が生じると思われるので、適時対応していくことが必要となろう。また、本学の教養教育の理念に沿った部会員への加盟者の増加も引き続き課題となろう。また現部会員のうち近年退職者が見込まれる。その手当も課題であろう。

## 5. 総合所見

全体としてみれば、本教育部会の運営と教育活動は、概ね問題なく運用されていると判断できる。引き続きこの状態を維持しつつ、さらなる改善を進めるとともに、現状と今後の課題に対処することが求められているといえよう。

教育部会用自己点検・評価シート（様式1）

### 項目・観点ごとの記述

#### 基準5 教育内容及び方法

5-1 【教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）が明確に定められ、それに基づいて教育課程が体系的に編成されており、その内容、水準が授与される学位名において適切であること。】

5-1-③： 教育課程の編成又は授業科目の内容において、学生の多様なニーズ、学術の発展動向、社会からの要請等に配慮しているか。

観点に係る状況（150字以上）

配慮している。法学、政治学両分野に渡る異なる科目の存在、総合教養科目においては同一名の授業科目においても取り上げる分野や方法論などが多様であること、複数の研究科に渡る様々な専門分野の担当者のありようなどから見て、学生の多様なニーズに応えるものであるし、担当者の学術水準から見て、学術の発展動向や社会からの要請等に配慮しているものであると言える。

根拠資料

シラバス、教員用自己点検・評価シート（様式2）、学生評価アンケート

5-2 【教育課程を展開するにふさわしい授業形態、学習指導法等が整備されていること。】

5-2-①： 教育の目的に照らして、講義、演習、実験、実習等の授業形態の組合せ・バランスが適切であり、それぞれの教育内容に応じた適切な学習指導法が採用されているか。

観点に係る状況（150字以上）

部会の提供する講義内容の特性に応じ、講義形式で行われる授業が多くであったが、その中で授業中に学生に発言を求めたり、報告をさせたり、ディスカッションを行ったり、オンラインでの説明やB視聴覚教材を適切に活用するなど、様々な学習指導法が採用されていた。また、課外での活動のレポートを要求することもなされており、全体として多様かつ適切な学習指導がなされていた。

根拠資料

シラバス、教員用自己点検・評価シート（様式2）、学生評価アンケート

5-2-②： 単位の実質化への配慮がなされているか。

観点に係る状況（100字以上）

期末試験による評価のみにとどまらず、多くの科目において、各種レポート、授業中の報告・発問への応答、授業後のコメントペーパー、ショートエッセイなどの提出、BEEF掲載の文献等の参照を求めるなど、様々な方法を用ることによって単位の実質化への配慮がされていた。

根拠資料

シラバス、教員用自己点検・評価シート（様式2）、学生評価アンケート

5-2-③：適切なシラバスが作成され、活用されているか。

観点に係る状況（50字以上）

各授業担当者により、展開予定の講義内容を反映した、要件を満たす適切なシラバスが作成され、活用されていた。ただし、学生アンケートによると、そもそもシラバスを参照していない学生が一定数おり、その意味で活用に課題があることは否めない。

根拠資料

シラバス、教員用自己点検・評価シート（様式2）、学生評価アンケート

5-2-④：基礎学力不足の学生への配慮等が行われているか。

観点に係る状況（100字以上）

オフィスアワーや授業後の相談、学生へのメールアドレスの開示等により相談しやすい環境形成がなされていたが、学生への具体的な対応は、個々の教員の工夫に委ねられているため、教員による濃淡があり、体系的・制度的な取り組みはなされていない。なお、コメントペーパーやレポートを頻繁に求める一部の科目では、基礎学力に問題のある学生を早い時期に特定することが可能であろうと思われる。

根拠資料

シラバス、学生評価アンケート

**5-3【学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）が明確に定められ、それに照らして、成績評価や単位認定、卒業認定が適切に実施され、有効なものになっていること。】**

5-3-②：成績評価基準が策定され、学生に周知されており、その基準に従って、成績評価、単位認定が適切に実施されているか。

観点に係る状況（100字以上）

シラバスに従った成績評価、単位認定が行われている趣旨の回答が、各担当教員から伝えられている。さらに講義において追加的に周知・説明を加えている者もいる。また試験に加えてレポート、講義への積極参加その他の複数の評価方法を組み合わせる科目もあり、適切に実施されていたと評価できる。

根拠資料

シラバス、教員用自己点検・評価シート（様式2）、学生評価アンケート

5-3-③：成績評価等の客観性、厳格性を担保するための措置が講じられているか。

<p>観点に係る状況（100字以上）</p> <p>講じられている。成績評価に関しては、期末試験による客観評価に加え、シラバスや講義の中で事前に告知した複数の評価方法を用いるなどして適切な配慮がなされている。他方で、一部の科目に学生からの不服申立てがやや多く、課題が残っている。</p>
<p>根拠資料</p> <p>シラバス、学生評価アンケート、国際教養教育委員会での提出資料</p>

## 基準6 学習成果

6-1 【教育の目的や養成しようとする人材像に照らして、学生が身に付けるべき知識・技能・態度等について、学習成果が上がっていること。】

6-1-②： 学習の達成度や満足度に関する学生からの意見聴取の結果等から判断して、学習成果が上がっているか。

<p>観点に係る状況（100字以上）</p> <p>授業評価アンケートに基づく科目の評価は総じて高く、教員の工夫、熱意の水準は総じて高かったと評価できる（ただしアンケートへの回答率は依然として低いものがみられる）。学習成果が上がっていると推定できるが、受講生の一週間あたりの学習時間は多くなく、課題を残している。また本部会の提供する科目の性質上、客観的に学習成果を判定する尺度の形成には困難を伴うと言わざるを得ないが、今後の検討課題としたい。</p>
<p>根拠資料</p> <p>シラバス、教員用自己点検・評価シート（様式2）、学生評価アンケート</p>

## 基準7 施設・設備及び学生支援

7-1 【教育研究組織及び教育課程に対応した施設・設備等が整備され、有効に活用されていること。】

7-1-④： 自主的学習環境が十分に整備され、効果的に利用されているか。

<p>観点に係る状況（50字以上）</p> <p>当部会の提供科目は講義形式が中心であり、講義室の施設・設備は映像設備等は一応整備されているが、学生の自主的学習環境については、参考文献や課題の提示によってその学習を促してはいるが、その学習環境については原則的には関与していない。ただし関連する文献や映像資料等で図書館に入っていないものは新規購入してもらっている。またBEEFを活用して、自主学習・補充学習を促している科目も年々増えつつある。</p>
<p>根拠資料</p> <p>シラバス、学生評価アンケート</p>

7-2 【学生への履修指導が適切に行われていること。また、学習や課外活動等に関する相談・助言、支援が適切に行われていること。】

7-2-①： 授業科目のガイダンスが適切に実施されているか。

観点に係る状況（100字以上）

授業科目毎に通常初回の講義でガイダンスが行われたり、資料が配布されたりしており、また科目によっては授業中の報告の事前チェックやレポート指導を行っているものもあり、さらにオフィスアワーの設定やメールアドレスの公表などを通じて、学生の相談に応じる工夫が各教員により講じられており、適切に行われていた。

根拠資料

シラバス、教員用自己点検・評価シート（様式2）、学生評価アンケート

7-2-②： 学習支援に関する学生のニーズが適切に把握されており、学習相談、助言、支援が適切に行われているか。

また、特別な支援を行うことが必要と考えられる学生への学習支援を適切に行うことのできる状況にあり、必要に応じて学習支援が行われているか。

観点に係る状況（100字以上）

オフィスアワーの設定やメールアドレス等連絡先の公開、BEEFの活用、講義後の質疑応答時間などについて伝えることなどで、随時質疑応答に答える体制がとられており、学習相談、助言、支援については、相当程度適切に行われていると思われる。

根拠資料

シラバス、教員用自己点検・評価シート（様式2）、学生評価アンケート